

# 現代の ことば

かわせ  
川瀬

いっし  
慈

私に触れてください、額で、頬で、唇で。ガラスケースの中から見えるのは、いつも同じ退屈な風景。仮面や色どりの衣服、アフリカから連れてこられたモノに囲まれて、私たちエチオピアのなかに、私たちが月曜の朝はさっぱり。またちは、小さくて窮屈な展示スペースに詰め込まれています。手をつないだカップル、いつものおはあさん、作業服を着たお兄さん、今日もここ

ら、私の前を通り過ぎていく人たちを観察しています。週末の博物館は、ツォム（精進期間）明けの教会のように、たくさんの人でこったがえし、活気にあふれています。それが月曜の朝はさっぱり。まるでマタフ（信仰）を失った教会のようで、寒々しい。たらあやしない。

## 十字架



んでいるようです。でも彼は普段会いに来ることも、私に触れることもない。私の隣のゲエズ語の旧約聖書に毎日文句を言います。私の主人、フカラマリナム司祭のことも正教会のことも、私の本当の役割、つまり人々に触れて祝福を与えるということや、その作法についても、この男は実は何も知らないのだ。

今日の午後のこと。黄色い帽子をかぶった子どもの集団が、私の目の前を駆けぬけていきました。1人の少女が突然私の前で立ち止まり、その目が一瞬だけ、じーっと私に注がれた。そのとき、久しぶりに、本当に久しぶりに、私の胸が高鳴った。でも少女はすぐに、私から目をそらし、友達の間を走って戻ってしまっただけです。

幾多の街を、村を、たずね歩いたことでしようか。広大な高原、テフ畑。川を渡り、丘を越えて、司祭は行く先々で出会う人々の額に、頬に、唇に私を押し当てるのです。大きな壺を背負って水くみに向かう女も、燃料となる乾いた牛の糞を集める少女も、歩みを止めて、私のもとにひざまずきます。司祭の前に運ばれてきた、全身をけいれんさせる、悪魔にとりつかれたという少年も、重い皮膚の病に侵されて息が絶え絶えの物乞いも、私に触れることで深い安らぎを得たのです。

人々は私たちが家に招き入れ、司祭の靴を脱がせ、彼の足を手で洗い、そしてその足に敬意をこめてキスをします。そうするとやはり司祭は胸元から厳かに私をとりだし、人々の額に、頬に、唇に押し当ててくれます。私は、何千回と、いや何万回と、誇らしい気持ちとともに、皆の肌に触れることで、銀の体を熱くし、人々を祝福してきました。私たちの教会はコンダールの中心の小高い丘の上にあり、聖母マリアを讃えるメズムル（賛美歌）を歌う子供たちの声や、司祭と仲間たちの深い祈りがこもった詠唱が聴こえてきます。夜な夜な響き渡るハイエナの声が、私の耳の奥でこだましています。乳香と炭が混じり合う匂い、燻されたヒョウタンの香りが、私のなかでよみがえってきます。そして、肉厚で温かい司祭の手の感触。

でもそれは、このガラスケースから遠く離れた国での、私の遠くなるような昔の出来事。私に触れてください。額で、頬で、唇で。

（国立民族学博物館助教、映像人類学・アフリカ研究）